



Title	カッシーラーとフォスラー：その哲学的立場の相違について
Author(s)	岩本, 智孝
Citation	メタフュシカ. 2020, 51, p. 55-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78427
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究ノート》

カッシーラーとフォスラー

——その哲学的立場の相違について——

Cassirer und Vossler: Über ihre Unterschiede in philosophischer Einstellung

岩本智孝

1. はじめに——議論の背景・本稿の目標

エルンスト・カッシーラー（1874-1945）は、新カント派から出発し、カントやドイツ観念論のみならず、同時代の分析哲学なども検討しながら、独自の記号論をうちたてたドイツの哲学者である。その主著 *Philosophie der symbolischen Formen* 『シンボル形式の哲学』（以下、PhsF）¹ は、哲学史にとどまらず、言語学、神話学、科学をも検討対象とし、それらの分野の発展を記号の観点から論じた大著である。いわば本著は、シンボル形式の理論によって、さまざまな歴史的事象を一貫したものとしてまとめ上げる試みであると言える。このような性質上、本著の大部分は、歴史的記述によって占められている。それゆえ、本著の読者には、歴史的記述から、その記述を束ねている理論的背景を汲み取ることが求められる。その中から、本稿では哲学史的記述について扱いたい。なぜなら、PhsF においてカッシーラーは自らの立場をはっきりとは明示していないことが問題としてあり、それを明らかにするためには、その哲学史解釈を分析しなければならないからである。以上の経緯を踏まえ、本稿の第一の目標を、**PhsF における哲学史的記述からカッシーラーの哲学的立場を読み取ることに定める。**

それと同時にカッシーラー自身の立場を客観的に見て取るための参照軸を据えたい。そこで、カッシーラーとは近いテーマで活躍しながら、歴史の捉え方という点で対立したカール・フォスラー（1872-1949）を取り上げたい。フォスラーは、イタリアの観念論哲学者・美学者のベネデット・クロウチェの影響を受けながら、美学を基軸とした観念論的言語学を模索したドイツの言語学者である。フォスラーはカッシーラーと同時代を生き、互いに自らの著作で引用し、検討しあう間柄であった。だが、カッシーラーとフォスラーは歴史の捉え方をめぐって対立しており、た

¹ 引用した訳文は、Bd. I が生松・木田訳、Bd. III が木田訳（下巻）のものである。

たとえば、その対立は「言語（的思考、ないし世界観）から科学（的思考、ないし世界観）への移行」²に対する考え方に表れている（vgl. PhsF III 384ff.）。端的に言えば、カッシーラーが「言語から科学への移行」を「発展」だと捉えているのに対し、フォスラーはそれを「転向 Abkehr」（GuK 220）だとしている。フォスラーの「転向」には、言語から科学への移行に際して、画期的な変化があるという意味が込められている。

ゆえに第二の目標は、**フォスラーの哲学的立場を読み取ることに定めることとする**。そして、この二つの目標を達成することで、カッシーラーとフォスラーの思想的対立に関する今後の研究の展望を開きたい。

2. カッシーラーによる諸理論への評価

2. 1. 精神の諸形式の体系学と個別的な哲学・歴史

PhsF が記述的著作であることはすでに述べたが、理論的部分が皆無であるわけではない。PhsF 第一巻「言語」の「序論」³は、PhsF 全体の序論ともなっており、同著の理論が要約されている箇所であり、同著の大半を占める歴史的記述を読解するために必要不可欠な部分である。ただし、同箇所は短く要約されているだけに難解であり、記述を通じて理解を深めることが要される。そういう意味で「序論」は、本稿の問題を解く最初の手掛かりとしてふさわしい。本節では、特にその第 I 節を扱いたい。

当該箇所において、カッシーラーは、(1) **ヘーゲルのように普遍的な精神の諸形式の体系学を志向する考え方**と、(2) **個別的な哲学・歴史の多元性を志向する考え方**の双方を批判し、双方の要素を併せもつ立場に立つことを宣言している（vgl. PhsF I 12ff.）。

カッシーラーのここでの考えを端的に言えば、(1) の利点は (2) に欠けている点であり、その逆もまたしかりである。まず、(1) について見ていこう。カッシーラーは、「精神」という概念の曖昧さに注意を向けながら、精神の問題を哲学に導入した人物としてデカルトの名を挙げている。カッシーラーによれば、近代哲学は、デカルトによって精神の全領域と限界を定めることをその目標とすることになったという（vgl. PhsF I 12）。この精神の概念は、たしかに曖昧なものではあるが、以下のことがデカルトからヘーゲルに至るまで概ね共有されているとカッシーラーは指摘する。

[...] 精神の *universitas* [普遍性]、その具体的全体性は、これを唯一の論理的原理から演繹することに成功したときにはじめて、真に捉えられたもの、哲学的に洞察されたものとみなされることになる。（PhsF I 13）⁴

² ここで述べられている「言語（的思考、ないし世界観）」とは、科学の営みとは区別される、より日常的な言語を使った営みのことを指している。

³ 以下、「序論」と記す場合にはこれを指すこととする。

⁴ [] 内は、生松・木田による補足。以下同様。

つまり、精神は、もともとその内容は明らかではなく、むしろその普遍性と全体性が「唯一の論理的原理」によって導出されることが求められる概念であると言える。この論理的原理は、論理的形式とも言い換えられ、精神のほかのすべての諸形式を演繹するものであるとされる。これをカッシーラーは学問論的に換言し、論理的形式を頂点とする「精神の諸形式の体系学」とし、これを貫く普遍的法則とともに、必要不可欠なものであるとしている。もしこれらがなければ、諸形式はただ並在しているのみとなるが、このような事態はデカルトやヘーゲルらのみならず、カッシーラーもまた危惧するものである。すなわち、カッシーラーは、諸形式の哲学、ならびにその理論の進展が記述化されたものとしての諸形式の歴史が、形式ごとにただ並在しているという状況を許容しない（(2)への批判）。

しかし、だからと言って、カッシーラーがデカルトやヘーゲルらと同じ立場に立つわけではない。彼らの立場においては——それをカッシーラーは「哲学的観念論」と呼んでいるが——、「[...]」論理形式の普遍性のうちに、それぞれの個別領域の特殊性とその原理の独自性が消失してしまいかねない [...]」(PhsF I 14)。この点をカッシーラーは批判する（(1)への批判）。つまり、カッシーラーはここにおいて、精神の諸形式の体系学がもつ普遍性と、諸形式の哲学ならびに歴史（言語の歴史、宗教・神話の歴史、芸術の歴史、等々）がもつ特殊性を、同時に保持することを要求している。

それでは、この要求の妥当性はどこにあるのか。この問いについては、2.3 ならびに 2.4 で検討するカッシーラーによる観念論と経験論の哲学史解釈によって一応の解決を見ることがになる。

2.2. 「哲学的観念論」という用語について

前節で「哲学的観念論」という用語が登場した。本節ではまず、PhsFにおけるこの語の用法について確認しておこう。カッシーラーが用いる「観念論」という語に注意を向ける必要があることは、すでにD・P・ヴィリーンによって指摘されている。ヴィリーンによれば、カッシーラーは、「観念論」という語をしばしば「理念の哲学 the philosophy of the idea」という意味で用いているという（cf. SMC 65）⁵。そして、この指摘は正しいと思われる。というのも、このことは、PhsFにおいて、プラトン、デカルト、ライプニッツ、カント、ヘーゲルらが「観念論」に含まれ、バークリが「観念論」に含まれていないことから裏づけられるからである。バークリはたしかに「観念」を扱う哲学を展開したが、哲学の方法としては「経験論」をとっている。そして、カッシーラーが、「哲学的観念論」とともに、哲学史における言語の問題の別の道を切り開いた潮流として「(哲学的) 経験論」を挙げていることから、哲学の方法という観点で両者を対立させていることがわかる（vgl. PhsF I 70）。

つまり、カッシーラーは、観念を扱う哲学ではなく、方法として理念的な哲学のことを「哲学的観念論」と呼んでいるのである。ここにおける理念というのは、前節で論じた、精神の諸形式の体系学がもつ普遍性を志向するという理念のことである。ここから推測するに、カッシーラー

⁵ ヴィリーンは、カッシーラーの講義録集である *Symbol, Myth, and, Culture* の編者であり、同著所収の“Critical Idealism as a Philosophy of Culture”の注釈にて、PhsFを参照しながら、このことを指摘している。

は「哲学的」という形容詞を付け加えることによって、それが方法論的な区分におけるものであることを示しているように思われる。また、少なくとも PhsF の当該部分においては、単に「観念論」あるいは「経験論」と書かれている箇所も、「哲学的観念論」、「哲学的経験論」の省略形であると解釈するのが文脈的に妥当であろう。以上にしたいがい、本稿では、方法としてのそれらであることを強調するため、「哲学的観念論」、「哲学的経験論」の語を用いることとし、前者については次節で、後者については 2.4 で検討する。

2. 3. カッシーラーによる哲学的観念論（デカルト・ライプニッツ）の批判と継承

カッシーラーは、哲学的観念論の源流をプラトンに求めている。ただし、カッシーラーが注目する言語の問題が、明確に哲学的観念論と結びついて精査されるようになった原点は、デカルト哲学にあるとされている。カッシーラーによれば、デカルト以降の哲学的観念論の領野では、「[...] *Lingua universalis* [普遍言語] への要求が立ちあらわれてくる [...]」(PhsF I 64, cf. Descartes[1974], pp.76-82) こととなった。デカルトは、数学において限られた数から数学全体の秩序を示すことができるのと同様に、限られた言語記号によって人間の意識内容全体を示そうとした。そして、この構想が実現することは、普遍言語の創造にほかならないが、この分析が完遂されることはなかったため、デカルトの普遍言語は構想のままで終わってしまったという (vgl. PhsF I 64)。

このデカルトの普遍言語の問題を新たな局面へと移行させた人物として、カッシーラーはライプニッツの名を挙げている。デカルトの普遍言語は、個別的な観念に至るすみずみまで分析しつくされなければ完成しえないものであった。それに対し、ライプニッツの「*Characteristica generalis* [普遍的記号法]」(PhsF I 43, cf. Leibniz[1903], pp.42-92, 245-247) は、デカルトの普遍言語がもつこの問題点を解消しているという。それは以下のようにしてなされる。

[普遍的記号法においては、] 分析の前進と記号法の前進とがたがいに他を要求し、条件づけてあるのである。なぜなら、思考が遂行するところの論理的な統一形成と論理的な区別とはすべて、それが一定の記号に固定されてはじめて、思考にとって真に明晰判明なものとなるからである。(PhsF I 66f.)⁶

以上の引用の後半部に関しては、特に説明を要するだろう。というのも、ここにはカッシーラーがもつ独自の記号観が反映されているからである。カッシーラーは、具体的・感性的な内容から抽出して——つまり、一部を残し、他を脱落させて——できた産物を、記号と呼んでいる (vgl. PhsF I 42)。したがって、記号は元の具体的・感性的な内容に比べてその豊かさにおいて劣っている。だが、この記号の劣った性質だけを見て、記号は事象を完全には写し取れないとして記号の価値を貶める態度——カッシーラーが言うところの「模写説」——を、カッシーラーは批判する。カッシーラーに言わせれば、一見劣ったもののように見えるこの記号の性質こそが、むしろ

⁶ [] 内は、本稿筆者による補足。以下同様。

高い価値をもつ。なぜなら、記号は抽出され、形式化されたものであって、これによって一層多くのことを表示できるようになっているからである。カッシーラーは実際に、化学式の例を挙げ、化学式はたしかにもはや特定の元素の内容を示してくれるものではないが、その代わりに化学の体系における関係を図示する力を得ていると述べている (vgl. PhsF I 43)。

つまり、上記の引用の文脈に立ち返れば、記号によってはじめて明晰に図示できるようになることがあるのであり、それによって分析も進展し、さらに分析によって記号法も洗練される、という関係にある、ということになる。カッシーラーはこの普遍的記号法の考え方を受け継いだ。そういう意味で、ライプニッツは、カッシーラーにとっては単に批判対象であるわけではなく、記号観に関しては先駆者にあたるのである。

このように、ライプニッツの普遍的記号法は分析の完遂と独立に語られうる。これこそが、普遍的記号法の利点である。だが、ここに一つの大きな問題が生じる。すなわち、デカルトの普遍言語にはあった、分析の完遂をもってそれが創造されるとする明確な最終目標が、普遍的記号法においてはなかなか見いだせない、という問題である。分析の前進と記号法の前進は、原理上無限に継続されうるのである (vgl. PhsF I 67)。分析がどこまでいっても完全なものとならないのであれば、普遍的記号に満足するしかなくなる。すると、普遍的記号による論理的・形而上学的な体系の「[...]」まさしくこの普遍性のうちに、言語特有の内容が消え去ってしまうおそれが生じてくる」(PhsF I 69)。

以上が、哲学的観念論に対するカッシーラーの所見と批判である。プラトンからデカルト、そして、ライプニッツに受け継がれた普遍的な言語という考え方は、次節で扱う哲学的経験論によって徹底的に批判されるのみならず、その力を否定されることになる。

2. 4. カッシーラーによる哲学的経験論（バークリ）の批判と継承

カッシーラーは、哲学的経験論にも批判の目を向けるが、哲学的観念論を批判するものとしての哲学的経験論に一定の役割があったと考えている。特に、PhsFにおいて哲学的経験論者に位置づけられているバークリは、前節で見た哲学的観念論におけるライプニッツと同様に、カッシーラーにとって単なる批判対象ではなく、先駆者にもあたるのである。カッシーラーの見立てによると、バークリの哲学は図らずも自己矛盾の様相を呈しているという。だが、それゆえに、カッシーラーはそれがむしろ自らの意に沿うものであるとして歓迎してさえいる。それがどういうことなのかを見ていくことにしよう。

バークリは、「抽象的で一般的な観念」——鳥、獣、魚、虫といった個別の動物からその個性を取り去った動物そのものの観念など——を拒否し、ある個別の観念が他の個別の観念のすべてを代理する represent、あるいは代表する stand for ことで一般的になることを認めている (cf. Berkeley[1949], intro., §9-12)。ここにおいて、特定の観念全体がすでに把握されていることに注目すべきである。これは、後述するが、「全体をすでに要素のうちに捉え、要素を全体のうちに捉えるという一般的な可能性」(PhsF I 32)を探究するというカッシーラーの理念にたしかに沿うものなのである。

しかし、パークリは、「抽象的で一般的な観念」という哲学的観念論の残滓を排除することに専心するあまり、普遍的なものの根源となる言語の力の否定へと向かった。パークリはこう切り出す。「この流布している考え〔抽象の大家たるスコラ哲学者たち、あるいはロックの考え〕の根拠をようやく考察できるようになった。管見によれば、この根拠とは言語である」(Berkeley[1949], intro., §18)⁷。そして、抽象的観念の擁護者たちがいかにして、言語から抽象的観念の学説を導き出したかを論じていく。そして、言語には情念が付随することがしばしばあるとし (cf. id. at intro., §20)、次のように結論づける。

したがって、考察すべき観念から言葉の衣装と重荷を剥ぎとって、その観念を明晰に見てとるよう最大限の努力を傾けるのが望ましい。言葉こそ、判断を曇らせ注意を散漫にする主因だからである。(id. at intro., §24)

当然ながら言語の否定という極端な結論に対して、言語哲学に取り組んでいるカッシーラーが賛意を示すはずはない。実際にカッシーラーは、「[...] 学問が [...] 使用する機関 (オルガノン) と道具は、言葉以外のものではありえない」(PhsF I 76) と述べている。だが、このように直接観念に触れようとしたパークリに待ち受けていたのは言語への転回である、とカッシーラーは論じる。パークリはもともと先述の「模写説」とらわれていたと言える。パークリが批判していた抽象的観念の擁護者が、言語は観念を表示するためのものだと考えていたのと同様に、パークリは、言語をある種の介在物と捉えていたのである。しかし言語はそのようなものではなかった。むしろその現実のほうが感性的記号言語にほかならなかったのだとカッシーラーは指摘する (vgl. PhsF I 77f.)。これこそが「転回」である。さらに言えば、単に感性的というのも不十分で (vgl. PhsF I 33f.)、感性的世界——パークリが言語を排してありのままに受け取ろうとした世界——だと思っていたものが、言語がもつ普遍性ゆえにすでに概念化されており、シンボリック世界であったのだ。シンボリック世界においては、先に触れた「全体をすでに要素のうちに捉え、要素を全体のうちに捉える」という原理が働いている。つまり、任意の一つの観念を取り出すと、それはあるがままの単独な観念ではなく、すでに全体に位置づけられているのである。

これは、PhsF の根幹をなす「表出」概念の一端である。カッシーラー自身が挙げている砂糖の例を取り上げてみよう (vgl. PhsF I 35)。砂糖は白さ、甘さといった個別的な諸性質をもっているが、これらの諸性質から砂糖という全体が成立しているのでも、性質をもたない全体 (基体) があって、それが諸性質をしたがえているのでもない⁸。そうではなくて、個別的な諸性質が「砂糖」という表象に統合可能なのは、それら諸性質が砂糖の全体にもとから関連するものとして規定されているからであるとカッシーラーは主張する。つまり、カッシーラーの考えでは、普遍性と特殊性は、どちらか一方から他方が導出されるという関係にはないのである。ここからわかる

⁷ 引用した訳文は、宮武昭によるものである。

⁸ 後者については、当該箇所においてカッシーラーが直接述べているわけではないが、PhsF 全体から十分読み取れる。

ように、これまで論じてきた方法論としての哲学的観念論と哲学的経験論の議論もこの「表出」概念にかかわっている。

このようにしてカッシーラーは、デカルトとライプニッツから普遍的言語の考え方を、バークリから「表出」概念へとつながるヒントを受け取っていたのである。

3. フォスラーによる実証主義批判——二層構造の観念論

本節では、カッシーラーの哲学的立場の参照軸として、フォスラーの前期の著作である *Positivismus und Idealismus in der Sprachwissenschaft: Eine sprach-philosophische Untersuchung* 『言語学における実証主義と観念論：言語－哲学的探究』（1904）⁹ を取り上げる（以下、PuI）。本著は、題名にある通り、フォスラーが専門とする言語学に、哲学上の立場である実証主義と観念論の議論を持ち込むという手法をとりながら進む著作である。もちろん、フォスラーの目論見が言語学においてとられるべき立場を哲学の文脈から借りて主張することにあるという意味で本著は言語学的著作であるのだが、その副産物としてフォスラーの哲学的立場が明示化されている著作でもある。

まず、フォスラーが哲学上の立場としての実証主義と観念論の区分をどのように考えているかについて見ていきたい。

実証主義と観念論のもとで、二つの異なった哲学的体系や体系群ではなく、まずわれわれの認識能力の二つの基礎的な方向性だけがあると理解してもらいたい。[…] 実証主義と観念論のあいだのわれわれの区別は […], われわれの認識の本質にではなく、目標と手段に関連があるのだ。実証主義と観念論は、認識論上の概念ではなく、方法論上の概念である。（PuI 1）

先に大きな前提を述べておくと、フォスラーは観念論の立場をとる。それはフォスラーが観念論的美学の第一人者のクローチェの後継者を自認していることから明らかである（vgl. PuI V）。その前提を踏まえて議論を進めたい。上記の引用でフォスラーは、実証主義と観念論が方法論上の概念であると断言しているが、注目されているのは方法の相違というよりむしろ、目標の相違である。さらにフォスラーは、この目標の相違に着目し、実証主義を二つに分類する。一方が、方法論の実証主義で、もう一方が、形而上学的実証主義である。このうち後者に関しては、直後で「ラディカルな実証主義」と言い換えられている（vgl. PuI 3f.）。そこから推測できるように、方法論の実証主義は穏健な実証主義のことである。フォスラーの言葉では、「方法論的で暫定的で従属的な実証主義」（PuI 3）と表現されている。何に対して「従属的」なのかというと、それは、観念論に対してである。

ここで目標の相違の話題に戻ろう。フォスラーが言うところの観念論¹⁰の目標とは何か。それは、認識を究明することである。そしてこの最終目標ゆえにそれにたどり着くための手法に根拠

⁹ 引用した訳文は、本稿筆者によるものである。

¹⁰ ここまでの議論からわかるように、フォスラーが用いる「観念論」の概念もまた、カッシーラーと同様に方法としてのそれであると推測できる。

が与えられるとフォスラーは考えている。逆に言うと、方法論的実証主義は暫定的な目標しか立てていない。その目標とは、専門的知識の解明である。これは、観念論の立場からすると、通過点に過ぎない。方法論的実証主義の手法は、確固たる目標を立てていないがゆえに何ら根拠づけられていない、ということになるのである。

しかし、それでも方法論的実証主義は、観念論の立場からは味方に引き入れやすい立場である。なぜなら、方法論的実証主義者が最終目標を観念論者と同じ〈認識の究明〉に定めた場合、もはや彼らを観念論者と呼んでさしつかえないからである。その一方で観念論と最後まで鋭く対立するであろう立場は、形而上学的実証主義のほうである。形而上学的実証主義者は、専門的知識の解明を最終目標に据える。その意味で、観念論に対しては「従属関係」ではなく、「並立関係」(ebd.)にある。さらに言うと、形而上学的実証主義者が方法論的実証主義者を、その暫定目標をそのまま最終目標とさせることで自陣に引き込む可能性まである。したがってフォスラーは、当時の言語学の大勢を占めていたという形而上学的実証主義を徹底的に批判することを自らに課したのである。

つまり、一人の人物の中で方法論的実証主義と観念論は両立可能であるわけだが、フォスラーの立場も実際にそうであった。フォスラーは、少なくとも言語学については以下のように進展すると考えていた。

- 1) 絶対的な〔言語の〕進歩、あるいは自由で個別的な〔言語の〕創造の段階
- 2) 相対的な進歩、あるいはいわゆる規則的な発展と互いを制限しあう集団的な創造の段階 (PuI 93f.)

まず、1)の段階について、これは言語表現が個別的で能動的な活動によって生まれる段階のことであるとフォスラーは考えている (vgl. PuI 91)。しかし、個別的な活動によって生み出された言語表現は、別の活動によって承認され、反復されなければ市民権を得られない。フォスラーによれば、このように言語表現が市民権を得る段階は、受動的な段階（あるいは、創造されないう段階）であり、1)と2)の中間に位置する。「受動的」というのはここでは、言語表現が別の活動によって制限されるという意味であると推測できる。そして、2)の段階では、これらの諸活動が広がりを見せ、言語共同体規模に至っている。これに関して、フォスラーは、「最も自由で最も権威のあるドイツ語の使い手であるゲーテ」(PuI 89)も例にもれず、集団——すなわち、ドイツ語話者の共同体——を意識して書かざるをえなかったと述べている。

以上の1)と2)の段階にはそれぞれ別様の研究が対応しているとフォスラーは主張する。

- 1) 純粹に美学的な〔言語考察〕、
- 2) 美学的－歴史的な〔≡発達史的な (SSE にて修正)〕言語考察 (PuI 94, vgl. SSE 19)

フォスラーによれば、この二つこそが観念論的な言語学の体系なのだという。まず、1)に関して、これをフォスラーは個別研究でしかありえないと述べている。具体的には作家の文体論など

のことを指す¹¹。この研究においては、言語的な表現形式は、対応する心的な直観と比較される。この意味で美学的であるとフォスラーは述べている (vgl. PuI 95)。そして、こうした個別的な記述は実証主義的な方法によってまとめ上げられるとされている。他方、2)は、類似した表現形式の——時間的のみならず、空間的な——比較や、語源学上の関係の考察に相当し、その意味で歴史的であるが、1)の美学的性質は保持されている——すなわち、美学的領域に立ち戻ることがある——とされる (vgl. PuI 94f.)。それゆえ、「美学的 – 歴史的」と呼称されている。これらの研究は、先に述べた言語の段階に対応するが、研究自体には前後関係があるわけではなく、言語学において表裏一体のものであるとフォスラーは考えている。

それでは、この1)と2)がなぜ「観念論的な言語学の体系」と呼ばれているのだろうか。それは、フォスラーが提示するこの体系が、言語の総体の究明を目指しているからだとは私は答えない。なぜなら、先に触れたように、フォスラーは認識の究明を観念論の目標として掲げており、これをフォスラーの専門である言語学に移せば、言語の総体の究明となるだろうからである。言語の総体の究明とは何か。これは個々の言語研究の単なる集合ではない。というのも、それが集合にすぎないのであれば、フォスラーが批判する形而上学的実証主義になってしまうからである。形而上学的実証主義の立場では、フォスラーが示すところの1)の個別研究を総括する研究はなく、個別研究ごとに目標が立てられ、個々の結論が導かれていく。しかし、フォスラーはそれに満足せず、2)の研究を要求する。2)の研究によって、言語は総体として、すなわち、歴史的な展開として示される。これこそが、フォスラーが目指す最終目標である。このとき、1)が方法論的実証主義的な研究、2)が狭義の観念論的研究、そして、1)、2)は全体として広義の観念論的研究となっていると言えるだろう。ただし、フォスラー自身が述べている通り、1)、2)は表裏一体であり、必ずしも1)から2)へと進展するものではなく、2)から1)へと立ち戻ることときにはあるだろう。だが、それでも段階的な構造になっているという特徴を有していることから、私はこの体系を、特殊性と普遍性の〈二層構造の観念論〉的体系と呼びたい。

4. 結論

カッシーラーは、哲学的観念論者のデカルトとライプニッツ、哲学的経験論者のパークリから部分的に考え方を受け継ぎ、それを自らの立場とした。まず、哲学的観念論が抱える問題は以下のようなものであった。それはつまり、ライプニッツの普遍的記号法は、普遍性のうちに言語の内容の特殊性が消え去ってしまう、という問題である。しかしながら、普遍的記号法の発想それ自体については、カッシーラーはこれを評価し、受け継ぐ姿勢を見せている。

他方、パークリの哲学については、普遍性の根源である言語の否定にまで至ったことが問題であったが、「表出」概念にかかわる考え方が提示された。そして、パークリにおける言語観の転回は、感性的記号言語の可能性を示し、普遍的記号法の問題点を解決する糸口となった。

¹¹ 実際にフォスラーは、*La Fontaine und sein Fabelwerk* (1919) や、*Dante als religiöser Dichter* (1921) といった著作でこれを実践している。

こうして、カッシーラーは、普遍性と特殊性に前後関係をもたさずに同時に要求することを自らの立場の旨とした。これに対して、フォスラーの立場は、〈特殊性から普遍性へ〉という前後関係を保持した〈二層構造の観念論〉になっている。

以上が本稿の結論である。ここからは、この結論から導かれる、カッシーラーとフォスラーの思想的立場の相違が生む帰結とは何か、という問いについて、現段階での展望を述べることにしたい。私は、普遍性と特殊性をめぐる両者の哲学的立場の相違こそが、両者の歴史の捉え方の相違を生んでいると予想している。カッシーラーは、普遍性と特殊性を同時に要求する。それゆえ、カッシーラーによってつづられる個々の歴史的記述は、すでにしてシンボル形式の体系という普遍性のうちに位置づけられている。つまり、個々の歴史的記述の連なりは、ただの連なりではなく、あらかじめ一つに方向づけられている。これに対し、フォスラーの立場では、観念論的な目標はあらかじめ立てられているものの、個々の記述を綴る段階と、それらを歴史的にまとめる段階が分けられている。これにより、個別研究がいかなる観念論的な結論を生むのかは定まっていない。

第1章で触れた重要な論点をもう一度取り上げよう。それは、「言語から科学への移行」は「発展」（カッシーラー）なのか、それとも「転向」（フォスラー）なのか、という論点である。つまり、「移行」に必然性があるのか否か、という論点である。本稿は、カッシーラーとフォスラーの哲学的立場を明らかにした。ここから、上に示した展望を研究として形あるものにし、「言語から科学への移行」そのものを取り扱うことを今後の課題として挙げ、本稿を閉じたい。

(いわもとともたか 哲学哲学史・博士前期課程)

略号一覧（カッシーラーとフォスラーの一次文献）

- PhsF I:** Cassirer, Ernst, *Philosophie der symbolischen Formen, Erster Teil: Die Sprache*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 2010. (エルンスト・カッシーラー『シンボル形式の哲学 [一] 第一巻：言語』、生松敬三・木田元訳、岩波書店（岩波文庫）、1989 年。)
- PhsF III:** Cassirer, Ernst, *Philosophie der symbolischen Formen, Dritter Teil: Phänomenologie der Erkenntnis*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 2010. (エルンスト・カッシーラー『シンボル形式の哲学 [四] 第三巻：認識の現象学（下）』、木田元訳、岩波書店（岩波文庫）、1997 年。)
- SMC:** Cassirer, Ernst, *Symbol, Myth, and, Culture: Essays and Lectures of Ernst Cassirer 1935-1945*, Yale University Press, New Haven and London. 1979. (エルンスト・カッシーラー『象徴・神話・文化』、米沢穂積訳、ミネルヴァ書房、2013 年。)
- GuK:** Vossler, Karl, *Geist und Kultur in der Sprache*, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Heidelberg, 1925.
- Pul:** Vossler, Karl, *Positivismus und Idealismus in der Sprachwissenschaft: Eine sprach-philosophische Untersuchung*, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Heidelberg, 1904.
- SSE:** Vossler, Karl, *Sprache als Schöpfung und Entwicklung: Eine theoretische Untersuchung mit praktischen Beispielen*, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Heidelberg, 1905.

参考文献

- Berkeley, George, A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge, in: *The Works of George Berkeley*, Vol. 2, Thomas Nelson and Sons Ltd, London, 1949, pp.19-113. (ジョージ・パークリー『人知原理論』、宮武昭訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2018 年。)
- Descartes, René, *Correspondance I*, Librairie Philosophique J. VRIN, Paris, 1974. (ルネ・デカルト『書簡（上）』、佐藤正彰ほか訳、デカルト選集 5、創元社、1940 年。)
- Leibniz, Gottfried Wilhelm, *Opusculs et fragments inédits de Leibniz*, Louis Couturat (ed.), F. Alcan, Paris, 1903. (ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ『論理学』、下村寅太郎ほか監修、澤口昭聿訳、ライプニッツ著作集 1、工作舎、1988 年。)